

## 青年ヘーゲル学派とマルクス (Ⅲ)

—— フォイエルバッハ ——

別 府 芳 雄

は し が き

筆者は1976年夏休みを利用して、東欧諸国を訪れたが、その帰途ルーマニアのブカレストから西独のミュンヘンに立寄った。偶々 Frau Olga Nimrichter(ミュンヘン在住)の案内で8月6日早朝同婦人の愛車B.M.W.に便乗させて載いて、約1時間余でフォイエルバッハの生誕の地ランズフート(Landshut)を訪れることができた。ランズフートはミュンヘン東北79キロの小都市でヘルテイ百貨店が賑わっていた。フォイエルバッハの生家はランズフート市にそのまま残っていて1階は書店になっていた。生家の建物の2階の道路に面した壁にはフォイエルバッハの生誕を記念する青銅の額が飾られていたのが、真夏の陽の光のもとで、よくみえたのも印象的だった。またオルガ老婦人の紹介でランズフート市の教会牧師の居室に通され、牧師からフォイエルバッハのみならず、ランズフート市のことやブルックベルクについてもお話を承ることができた。

ヘーゲルからマルクスへの過渡において、特異な思想を示している哲学者はフォイエルバッハである。ドイツにおける最初の明確な唯物論者、しかもヘーゲルの直弟子→ヘーゲル批判→宗教批判→非歴史的・自然主義的唯物論→現実的人間学の提唱、まず本学々生諸君でフォイエルバッハの名を知らぬ人はいまいが、このくらい誤解されている人物も少いと思う。

フォイエルバッハは「ヘーゲルの運命」といわれている。ヘーゲル哲学

こそ、フォイエルバッハ流の哲学を必要とする。ヘーゲルの全体系は、その完成と同時に修正が必要となってくる。ここにマルクスの登場を求める歴史的意味がある。

学生諸君はけっして通俗書に書かれているような——マルクスはヘーゲルから弁証法を学びとり、フォイエルバッハから唯物論をとって唯物弁証法を組み立てたなどという安易な解釈をしてはならない。その辺の事情を納得して貰うことが小論の目的である。今回はフォイエルバッハについて述べるが、1ではフォイエルバッハの略伝を、2ではフォイエルバッハの主張を、3ではマルクスとの関係について述べる。

## 1

ルードウィヒ・フォイエルバッハ (Ludwig Feuerbach) は1804年7月28日に、バイエルンのランズフートで生まれ、1872年9月13日にニュールンベルクの近郊のレッツヘンベルク (Rechenberg) で68才で死んだ。墓はニュールンベルクのヨハネ墓地である。

彼は家族の多くの人びとが、それぞれ違った道ではあるが著名な人物となった一家に生れた。たとえば彼の父親アンセルム・フォイエルバッハは「近代刑法の父」とさえいわれるくらい有名な学者であったし、初期自由主義の代表者として、かつバイエルンの憲法闘争に重要な役割を果し、1803年にはバイエルン刑法典を編纂し、バンベルクやアンスバッハなどの控訴院長もやって司法界では重きをなした人物である。彼が生れたとき、この父親は当時ランズフート大学教授であった。長兄ヨゼフ・アンセルム (1798~1851) はフライブルク大学教授として古典考古学者、文献学者として有名な男だったし、次兄のカール・ヴィルヘルム (1800~1834) はエルランゲン高等学校の数学の教師で、「数学者としてフォイエルバッハの円」が幾何学では有名なように優れた数学者であった。このカールはアーソルド・ルーゲとともに秘密結社を結成した疑惑をうけて1824年5月、逮

捕され、獄中で発狂。2回自殺企図をしている。

3男のエドアルト・アウグストは、エルランゲン大学の法学教授でゲルマン法の研究で父に劣らぬ才能ぶりを示した。4男が小論の主人公つまりルードウィヒ・フォイエルバッハである。このように長兄アンセルムは神学者、次兄カールは数学者、すぐ上の兄は法学者、そのほか甥のアンセルムも画家として一家をなし、各自それぞれ異った道ではあるが著名な人物となった一家に生まれた。この彼が師のヘーゲルに叛旗をひるがえし、徹底した宗教批判をおこなうということは勇気を要するには違いないことは勿論だが、生来の卓越した資質も多いに関係があろう。

彼は1806年に、家族とともにミュンヘンに移住し、1817年にアンスバッハのギムナジウムに入学し、聖書を読みふけて神学への強い関心を示していた。1822年にギムナジウムを卒業して、しばらく自宅で独学していたようである。1823年に、ハイデルベルク大学に入って神学を学んだが、カール・ダウプ (Karl Daub) (ヘーゲルの友人でハイデルベルク大学副学長) の講義を聞いてヘーゲルが死ぬ7年前の1824年にベルリン大学に転学して、ヘーゲルの弟子となった。

当時ハイデルベルクではパウルス (Paulus) が合理的神学を代表し、ダウプがヘーゲル哲学を基礎とした思弁的神学を代表していたようだが、パウルスの講義からは、ほとんど何もうるところがなかったらしく「詭弁の蜘蛛の巣 (ein Spinnwebgewebe von Sophismen)<sup>1)</sup> だった」と後に述べているし、このイヤラシイ教師の「出来損いの聡明が吐き出す痰 (Schleimausswurf eines missratennenen Scharfsinns)<sup>2)</sup> にイヤ気がさして、ベルリン大学へ転学したくなったようである。たしかに、当時のハイデルベルク大学には彼を心服させる程の優れた哲学者はいなかった。唯一の哲学者はエアハルトだったが、これとても「哲学者といっても名ばかりの話で実際上的ことではない」という程度のしろものであったからイヤ気がさしたのも無理からぬことであった。ただしダウプは可なり評価したらしく「その思弁

的な宗教の取り扱い方が彼に哲学の興味を抱かせた<sup>3)</sup>」ようであった。彼はベルリンに行った。彼が19才の時であった。

2年間ヘーゲルに学んで「ヘーゲルの講義を非常に楽しみ<sup>4)</sup>」にし、「ヘーゲルの直弟子であって師の冥想的精神を多少は会得した<sup>5)</sup>」といった。彼はベルリン大学に転学して4週間のちにはヘーゲルの講義からダウプでは曖昧だったところをじつに明快に理解した。というのはヘーゲルの講義は著書にくらべるとハルカに解り易かったからであり、彼はますますヘーゲルに傾倒していった。

1825年の夏（フォイエルバッハ、21才時）からは、神学を止めて哲学に転向する。このくらいヘーゲルに心酔していた彼は、「バッハマンによる師ヘーゲルへの攻撃に答えるように求められたとき、かれは完全なヘーゲル弁護で答えた<sup>6)</sup>」（『反ヘーゲル批判』）のは当然であろう。

しかし約2年間のヘーゲルへの傾倒ののち、ヘーゲル哲学への懐疑が芽生え始めていった。ことにヘーゲルのいう「哲学と宗教の融和」(Versöhnung der Philosophie mit der Religion) は彼には納得できなかったし、ヘーゲルの壮大な哲学の体系は、まったく美事ではあっても、将来の哲学のありかたについてヘーゲルがどう考えているのだろうか、という点でも、どうも納得できない点が残ってしまった。

しかし1839年の『ヘーゲル哲学批判のために』(Zur Kritik der Hegelschen Philosophie) の時期では、彼はハツキリとヘーゲル批判を打ち出してきて、ヘーゲル左派の立場を明らかにした。彼はこの本のなかで、ヘーゲルの哲学に対してこう批判した。「ヘーゲルの哲学は合理的神秘教である」(Die Hegelsche Philosophie ist rationelle Mystik<sup>7)</sup>) 「それゆえ同時に魅力的(anziehend) なものであり、しかも同時にまた反撥を感じさせる(abstoßend<sup>8)</sup>) もの」なのだといひ、ヘーゲル哲学を合理的神秘主義と断じ、ヘーゲルには物質的現実が欠けていると批判した。

これよりさき、フォイエルバッハはバイエルンの奨学生であったからべ

ルリン大学の課程を修了したうえで、そののちバイエルン州の大学で1年間を過ごさなければならない義務があった。そこで彼はエルランゲン大学で自然学科とくに生理学、解剖学、植物学を履習したことは注目すべき点である。これはまた、彼の自然への関心を示す証拠でもある。

1828年、彼はエルランゲン大学を卒業し、1828年の夏、彼は哲学博士の学位をえた。(24才時)。論文のテーマは「唯一普遍無限の理性について」(De ratione una, universali, infinita)であった。審査にあたったのはヘーゲルとハルレスであった。

1829年以来、彼はエルランゲン大学私講師として29～32年にいたる間、デカルトとスピノザについて講義し、それから論理学と形而上学、最後に近代哲学史を講じた。この時期に書かれたと推定されるノートには、彼が次第にヘーゲル哲学から離脱して、感性的・自然的な人間学へ接近しつつあったことを忍ばせるような断想が書きしるされている。たとえばヘーゲルが高所から絶対精神を振りかざす姿勢を批判して、「人々は哲学においてもまた下から始めなければならない。すなわち卒伍から身を起こさなければならない。すなわち人々は哲学においてもまた、王子として生まれることを欲してはならないし……將軍であることを欲してはならない<sup>9)</sup>」と書きしるしている。

彼はキリスト教を完全な宗教とは考えなかった。1830年に彼は匿名で『死と不死についての考察』(Gedanken über Tod und Unsterblichkeit)を公刊して「魂の不死」を取扱ったことがある。彼は肉体の不死には当然、反対したが、精神の不死は可能だと考えた。つまり類および文化は少くとも個体の死を越えて生きるに違いない、と考えた。ただ彼がこの本の付録に書いた二行詩つまり、「諷刺的神学的二行詩」(Satirisch-theologische Dichtchen)はキリス教会や政府につきつけられた刃のようなものだったし、何よりも痛烈な宗教批判であり、彼の平生のウップンの吐露でもあった。また現存の社会秩序への批判さえも含んでいたから、この書物

は間もなく官憲に没収されてしまうことになる。勿論、彼の匿名はすぐ見破られて、父親の予言どおり、彼はエルランゲン大学を追われることになる。

当時のドイツのキリスト教会は国家権力と手を結んで保守主義の黒幕的な存在であって、進歩的勢力に対決して、その弾圧に協力する姿勢を示していたから、自由主義的な心情を抱いていた若いフオイエルバッハとしては、政治的弾圧に対する反感は、そのままキリスト教の現状への反感となったのも無理からぬことといえよう。彼はフランクフルト・アム・マインに移住した。それはパリへの脱出を狙ったものであった。彼の目的は成功しなかった（資金不足）。ここでフランス語を修得し、フランス啓蒙思想を学んだことが、彼のその後の思想形成に大きな影響を与えた。彼の名著『ピエル・ベイル』は彼のフランス語学習の結晶であった。このピエル・ベイル氏はフオイエルバッハによって始めて発掘され、かつ再発見されたフランスの思想家である。

1833年5月28日、彼の父親が死去した。さらに1834年3月12日には、次兄のカールもまた世を去った。こうした逆境のなかで、友人カップの尽力のおかげで種々の雑誌に投稿し、稿料によって生活の資をえていたようである。

1835年から36年にかけて、彼は再びエルランゲン大学の教壇に立って近代哲学史を講ずるチャンスが訪れた。しかし、あの『死と不死についての考察』がまたしても、彼の在職を妨害した。「自分はすぐれた意味において著述家であり人間である<sup>10)</sup>」と感じていたフオイエルバッハは教職を断念して、むしろ外的なものに、いっさい捉われずに、著述家として、自分の資質を伸ばそうと考えた。

1833年以来、知り合いになり、かつ相愛の関係だったベルタ・レーヴ (Bertha Löwe) と37年11月12日結婚した。彼女は製陶工場の監督の娘で、フオイエルバッハより1才年上であった。フオイエルバッハはこの時以

来、工場と同じ村の或る農園に隠棲して愛妻と一緒に民間の哲学者として生活することになる。草深いブルックベルクこそ、彼が生活した村であった。彼は、その後ほとんど一生をこの村に住んで彼の革命的な思想を育てていった。

1843年10月23日にクロイツナハにいたマルクスから『独仏年誌』に掲載すべき寄稿を求められたが断った。

さらに1860年に妻の工場が破産して、経済的窮乏が訪れ、ブルックベルクからレッヘンベルクに移らなければならなくなる。しかしレッヘンベルクの生活はけっして快適とはいえず、「屋根裏の彼の書齋も応接間と彼が呼んだ部屋もまったく暖房のきかない惨めな状態であった。しかしブルックベルクでは村の人びとの暖かい交際があったが、ここではもはや孤独な彼をなぐさめる者も少なかった<sup>11)</sup>」ので彼の心を占めた憂愁の雲は晴れなかった。

彼はブルックベルクでは、ごく個人的に講義もしたし、公には1848～49年にハイデルベルクによばれて、学生その他を相手に講壇にのぼった。しかし、この1848年12月1日から1849年3月2日にかけてハイデルベルク市講堂で行った講演でさえ、大学の講堂を使用することは許されず、学外の議事堂を使ったくらいであって、1848年の革命の時ですら、彼は何ら積極的な活動などはしなかった。1849年にフランクフルトで開催された民主主義会議に出席したが活動はしなかったし、フランクフルト国民議会に立候補をすすめられても断っている。

彼は生涯を「教会さえもない」寒村に留って著述にいそしんでいたから、孤独と自然への接近は、彼の哲学に大きな影響を与えたことは見抜がせない。晩年、彼は社会主義に関心をよせ、『資本論』も研究していたし、1870年には社会民主党に入党もした。

1866年（62才のとき）彼は約10年の沈黙を破って新著を公刊した。『唯心論と唯物論——とくに意志の自由に関連して』（Über Spiritualismus

und Materialismus, besonders in Beziehung auf die Willensfreiheit)がそれである。しかし彼はこの年に軽い脳卒中の発作に襲われた。その後、ほぼ回復したようにみえたが1870年(66才のとき)再発した。そのうち脳卒中後のマヒ症状によって、あらゆる仕事を奪われて悲しい<生涯の夕>を見つめなければならなかった。72年9月5日頃感冒にかかり、こじらせて9月13日逝去した。

Keine Religion ist meine Religion.

Keine Philosophie……meine Philosophie.

これは自嘲とも思えるが、——彼の「断片」(Fragmente zur Charakteristik meines philosophischen Curriculum vitae)の一句で、孤独な彼の訴えが伝ってくるような、美しい、胸を打つ言葉である。

- 注 1) Karl Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S. 84. レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』(I) 邦訳, 前掲, 91頁。
- 2) ibid., S. 84. 同書, 91頁。
- 3) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p. 85. マクレラン『マルクス思想の形成』邦訳, 前掲, 136頁。
- 4) Karl Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, S. 85. 邦訳, 前掲, 91頁。
- 5) ibid., S. 85. 同書, 91頁。
- 6) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx op. cit., p. 86. 邦訳, 前掲, 137頁。
- 7) L. Feuerbach, Zur Kritik der Hegelschen Philosophie, Reclam, op. cit., S. 62. フォイエルバッハ「ヘーゲル批判のために」(『フォイエルバッハ全集』第1巻, 船山信一訳, 福村出版, 1974, 313頁。
- 8) ibid., S. 62. 同書, 313頁。
- 9) フォイエルバッハ「断想」(『フォイエルバッハ全集』第1巻, 132頁。
- 10) K. Löwith, op. cit., S. 80. レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』邦訳, 前掲, 86頁。
- 11) 城塚登『フォイエルバッハ』勁草書房, 1966年, 210頁。
- 12) Feuerbach, Fragmente, Reclam, op. cit., S. 323.

## 2

フォイエエルバッハの全労作は一つの思想つまり宗教というもので一貫している。また彼のキリスト教批判は歴大な文献や歴史的事実を基礎として、きわめて実証的なものであった。このことは、彼のどの著作を読んでも、すぐわかることだが、彼みずから1866年（死ぬ6年前）に発表した『結語』の最後のコトバをみてみよう。「願望が世界と分裂しているところ、人間が本性（自然）の方から見て可能であること以上を願望しているところ、したがって諸願望が自然の諸力および諸限界を凌駕しているところ……存在者の特徴的な作用および特徴的な啓示はそれ故にまた自然ではなくて奇跡なのである。そして、この神が有神論の神であり、とくにキリスト教の神である。しかし奇跡は、すでに『キリスト教の本質』および『宗教の本質』において飽（あ）きるほど明示されたように、人間の超自然的な願望が実現されたもの以外の何物でもないのである<sup>1)</sup>」と。

また、彼の宗教研究、その批判の集大成であった『神統記——古典的・ヘブライ的およびキリスト教的古代の諸文献にしたがって』（1857）（Theogonie nach den Quellen des klassischen, hebräischen und christlichen Altertums）のうちの数句をとり出してみよう。

彼は第8章、信仰の本質（Das Wesen des Glaubens）の冒頭からいう、「神性は根源的且つ本質的には、いかなる理性対象でもない、すなわち思弁や哲学のいかなる対象でも、またはいかなる産出物でもない<sup>2)</sup>」「神々は、まだいかなる哲学者たちも存在していなかったときにも存在していた<sup>3)</sup>」「神性が一般に希求の対象であるのは、もっぱら神々の本性が人間の諸願望の本性に相応するからである<sup>4)</sup>」と述べているし、第12章、幸福に対する願望（der Glückseligkeitswunsch）では、「願望は神々の根源であり、願望は宗教の根源・根本本質・原理である<sup>5)</sup>」「人間が不幸な者として害悪を防ぐ神々または神性一般に切願する場合には自分の諸苦悩と諸害悪

とから解放されたいという願望である。一語でいえば、神々の根源であり、宗教の根源、根本本質・原理であるような願望とは、幸福でありたいという願望である<sup>6)</sup>という。

さらにまた第26章「神と人間」(Gott und Mensch)をみると「神および自然は単に二詞一義(Hendiadys)、二ツに分割された一、二ツの言葉によって表現された一ツ(のもの)にすぎない<sup>7)</sup>」「神および人間もまた、一ツの二詞一義にすぎず、人間を通して作用する神、または人間のなかで作用する神、および人間と共に作用する神は単に人間の同語反復にすぎない<sup>8)</sup>。すなわち人間の本質が或る他の言葉で言表されたものにすぎない」という。

また第37章「有神論と神人同性同形説」(Theismus und Anthropomorphismus)をみると「もし神の本質が実際に——人々がそう申し立てているように——絶対的な本質であり、人間の本質とは全くちがった本質であるならば、そのときには人間はまた神のために全くいかなる悟性をもいかなる感覚をももたず、したがってまた神に対する尊敬と嘆賞とのいかなる火花をももっていないのである。なぜかといえば、そのときには人間には価値評価の規準が欠けているからである。詩的感覚をもたないで誰が或る詩人を最高の達人として賞賛したり尊敬したりすることができ、音楽的感覚をもたないで誰が或る音楽家を最高の達人として賞賛したり尊敬したりすることができるであろうか？ 私が最高の本質(存在者)として尊敬することができるのは、ただ私自身の本質を占有し且つ表現しているものだけである<sup>9)</sup>」と。

また彼は『ピエール・ベイル』(Pierre Bayle)のなかで、ベイル氏の思想における理性と信仰の対立の矛盾について述べつつ、この矛盾こそ近代人が直面している課題なのだと訴える。「人間が信仰は理性に矛盾することに気がつき且つ信仰は理性に矛盾すると語るところ——そこでは人間は信仰から抜け出しており、理性は自分を信仰から解放し、自分を独立な

ものにし、信仰を一つの客観として自分に対立させたのである。そしてこの客観は最初は反省の客観になり、次には懷疑の客観になり、その後は批判<sup>10)</sup>の客観になり、最後に非難の客観になる」のだという。

そして後に次の問をもって、この矛盾を明解にしている。「もし理性が信じられる価値がないならば、そのときあなたは、いったい、理性が信じられる価値がないということにかんして理性を信じることができるだろうか？」<sup>11)</sup>と追究する。さらにまた、彼の『宗教の本質にかんする講演』(1851)

(Vorlesungen über das Wesen der Religion) においては「しかし私の諸著書がこういう区別をもっているにもかかわらず、厳密にいいますと、それらはすべてただ一つの目的、一つの意志および思想、一つのテーマをもっているだけであります。このテーマはまさに宗教と神学およびそれらのものに<sup>12)</sup>関連しているものであります」と彼みずから、宗教研究（あるいは宗教批判）という一つの目的、一つのテーマをもって一貫してきたことを告白している。「遺された諸箴言」(Nachgelassene Aphorismen)

(レッヘンベルク時代からブルックベルク時代の最後の数年ころ書かれたものと推定されている) のなかにさえ「人間はどういうふうにして宗教に——すなわち神聖で不可侵なものとしての対象に対する怖れまたは畏敬という宗教的感情に——到達するのか？ それは無からであり迷信的な恐怖からである」<sup>13)</sup>「私はただ一つのことだけをなしたかった。すなわち私はただ一つの根本思想だけを人類の意識の光りのなかに投げこみたかった。

私はその他の何事をもなしたくなかった」<sup>14)</sup>「私の諸著書はたいへん深く、仮象と本質とをたいへんよく区別しながら、たいへん真剣に、宗教および宗教の諸表象のなかに入っていく。そのことの結果私の諸著書は、信仰をもっている人々にとっても、いかなる信仰をもたない反対の人々にとっても、読みづらいものである」<sup>15)</sup>と書きしるされているから、彼が生涯を通じて、一貫して宗教というテーマを「たいへん深く」「たいへん真剣に」研究しつづけていたことがわかる。

ただしフョイエルバッハ自身みずからの研究の限界を自覚して、自嘲をもって1846年自分の著作全集への序文で自己批判して以下のように慨嘆している。すなわち「よろしい。しかしあなたの主題はそれにもかかわらず依然として単に頭脳と心臓との事実すぎない。しかるに害悪は人類の頭脳または心臓のなかに坐っているのではなくて、人類の胃のなかに座っているのである。しかし、もし胃が病んでいるならば、すなわちもし人間の実存の基礎が破壊されているならば、そのときは頭脳と心臓とのあらゆる明晰性および健康は何の役に立つだろうか？……人類のあらゆる諸害悪および諸苦悩は——頭脳と心臓（心情）とのあらゆる諸病気さえも——ここから由来するのである。それ故に直接にこの根本害悪の認識と除去とに<sup>16)</sup>関与しないものは無用な<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>がらくたである」と述べ、彼はハッキリと——人間の胃袋の問題（経済問題）に関与しない自己の哲学の限界、いいかえると、たんに自然主義的であって、歴史的でもなければ経済的でもない唯物論の不徹底な性格について自覚していたものと思われる。

- 注 1) フョイエルバッハ「結語」（『フョイエルバッハ全集』第14巻、船山信一訳、福村出版、299頁。）
- 2) L. Feuerbach, Theogonie, Gesammelte Werke, Band 7, Akademie-Verlag, Berlin, 1969. S. 41. フョイエルバッハ「神統記」（上）（『全集』第13巻、前掲、66頁）
- 3) ibid., S. 41. 同書、66頁。
- 4) ibid., S. 41. 同書、66頁。
- 5) ibid., S. 77. 同書、121頁。
- 6) ibid., S. 77. 同書、121頁。
- 7) ibid., S. 194. フョイエルバッハ「神統記」（下）（『フョイエルバッハ全集』第14巻、7頁）。
- 8) ibid., S. 194. 同書、7頁。
- 9) ibid., S. 280. 同書、151頁。
- 10) Feuerbach, Pierre Bayle, Gesammelte Werke, Band, 4. S. 142. フョイエルバッハ、「ピエール・ペイル」（『全集』第8巻、前掲、177頁。）
- 11) ibid., S. 172. 同書、212頁。
- 12) フョイエルバッハ「宗教の本質にかんする講演」（『全集』第11巻、190頁）

- 13) フォイエルバッハ「遺された箴言」(『全集』第3巻, 323頁)
- 14) 同書, 343頁。
- 15) 同書, 344頁。
- 16) フォイエルバッハ「最初の全集版への序言」(『全集』第2巻, 286頁)

### 3

1843年1月25日、マルクスはルーゲあてに書簡を送って『アネクドータ』を受けとったことを報じている。じつは、この『アネクドータ』にフォイエルバッハが発表した『哲学改革のための暫定的命題』(Vorläufige Thesen zur Reformation der Philosophie) が掲載されていたのである。

周知のようにマルクスは1843年3月17日に『ライン新聞』の編集から手を引いてしまった。しかしマルクスは、新聞記者として現実の社会問題と対決したとき、ヘーゲル法哲学では、何とも解決できない諸問題があることをイヤという程体験した。だから「マルクスは≪ライン新聞≫をしりぞき、また政治時評家として直面した社会的諸問題を理論的に徹底的につきとめたいと痛感するとともに、自分自身の哲学的基盤であるヘーゲル哲学と対決する必要があるということが、ふたたびかれの重大な関心事とな<sup>1)</sup>てきた……そして1843年の3月から8月までの期間に、この仕事に専心」することになる。その結果「ヘーゲル法哲学の根本問題である市民社会と国家との関係が、かれ(マルクス)の関心の中心をしめる<sup>2)</sup>」ようになっていく。

ところでマルクスの思想発展における質的な転換にかんして「哲学的にもっとも重要なことは、唯物論への移行<sup>3)</sup>」の時期であろう。そのばあいヘーゲル批判が「フォイエルバッハの≪哲学改革への暫定的命題≫の影響をうけて、ふたたびとりあげられ<sup>4)</sup>」ることになる。つまりここにマルクスに与えるフォイエルバッハの思想的重要性がある。マルクスがちょうどヘーゲルを批判したいと思っている、その時に、フォイエルバッハの『哲学改

革』のなかの言葉、「神学の秘密は人間学である」「ヘーゲルの論理学は理論的にされ具体的にされた神学つまり論理学とされた神学である」「神学は幽霊信仰 (Gespensterglaube) である」という言葉はマルクスに深い印象を与えたし、何よりもマルクスにとっては啓示であつたに違いない。マルクスの胸にジーンとくる言葉であつたであろう。その意味ではフォイエルバッハの著作はマルクスにとっては、ヘーゲル以後の「理論上の革命」だつたと思われる。

しかしエンゲルスが『ルードウィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終焉』(Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie) のなかで「このときにフォイエルバッハの『キリスト教の本質』(1841年・ライプツイヒ) があらわれた。そしてこの本が、あの唯物論を単刀直入に、またも王座につかせることによって、この矛盾を一撃のもとにうちこわした……こうして束縛はとかれた。あの<体系>(ヘーゲル哲学) は、はねとばされ、投げすてられ、そしてあの矛盾は想像のなかにのみ存するものとして解消された——この本がこの解放にどれほど大きな働きをしたかは、それをみずから体験した人でなくては考えることさえできまい。その感激は一般的であつた<sup>5)</sup>」と述べているが、このエンゲルスの指摘は、エンゲルスの記憶ちがいのようである。マルクスはフォイエルバッハの『キリスト教の本質』ではなくて、むしろその後の著作から、より多く影響を受けるのであつて、『キリスト教の本質』(1841年) から、そんなに影響されるワケがない。というのは、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』は結論部分でさえも、未だ観念的であつて、フォイエルバッハ自身、この時期では、自分を無神論者などと思つてもない時期なのだから、エンゲルスのいうような——唯物論を王座につかせたとか、ヘーゲルの観念論の体系を一撃のもとに打ち倒した、などということはおかしい。やはり老エンゲルスの記憶ちがいであろう。(1830年代のフォイエルバッハは未だ観念論者でヘーゲル主義者。40年代の後半

から唯物論者、そののち、ずっと唯物論者として留ったこと、またエンゲルスの『終焉』が1888年に書かれていること、に注意せよ)。

1841年の『キリスト教の本質』については、マルクスは「ごく一般的な意味でフォイエルバッハの主張に賛成<sup>6)</sup>」した程度であつたに違いない。だからマクレランが指摘したように、マルクスに新しい見解をとらせるようになった著作は、「それはフォイエルバッハの『哲学改革のための暫定的命題』<sup>7)</sup>である」とする方が正しい。さらにフォイエルバッハの著作で非常に重要なことは、それらが公刊された時期である。いわゆるタイミングの点が非常に重要である。1841年の11月に出版されたフォイエルバッハの『キリスト教の本質』から、マルクスが影響されたと思ったのはエンゲルスの記憶の誤りであることは既に述べたが、もしマルクスが『キリスト教の本質』から受けた影響を強いていえば——「それもエンゲルスなら読者にそう信じさせたであろうほどには明確なものではなく、その影響もエンゲルスがいう方向のものではなかった。なぜならこの書の主題は宗教批判であつたが、マルクスはすでにブルーノ・バウアーから無神論を学んでいたもので、それはマルクスには格別興味あるものではなかった。それよりもずっとマルクスの心を打ったものは、この本の『ヒューマニズム』<sup>8)</sup>であつた」のだ。フォイエルバッハの人間学——「その本質が共同体的で、その知識が感覚的認識を介してくるものであり、自然との絶えざる交換において生活する存在者というかれの人間観<sup>9)</sup>」——こそマルクスの心を強く打ったものなのである。人間学は、フォイエルバッハによると、すべての科学の基礎である。彼は『改革』のなかでハッキリと「新しい哲学——唯一の積極的な哲学——は、自然の自覚的本質・歴史の本質・諸国家の本質・宗教の本質であるような人間であり且つ自分をそれらの本質として知っているような人間である<sup>10)</sup>」「自然は人間の根底である<sup>11)</sup>」と書いたが、これはマルクスにとって啓示のような言葉として感じられたに違いない。

だからフォイエルバッハが『キリスト教の本質』(1841)につづく諸著作

によって「青年ヘーゲル学派のなかで、よりいっそう顕著な影響力をもつようになったのは1843年のはじめから」<sup>12)</sup>—それ以降と考えるべきであって、「1843年の夏マルクスが書きあげたヘーゲル政治哲学批判の各ページはフォイエルバッハの方法の影響」<sup>13)</sup>を十分に感じとることができるのである。

フォイエルバッハは1843年7月、パンフレットとして『将来の哲学の根本命題』(Grundsätze der Philosophie der Zukunft)を刊行して、ハッキリとヘーゲル哲学を批判し、新しい哲学の出発を提唱する。そして彼の「全努力は精神の絶対的哲学を人間の<sup>14)</sup>哲学的哲学に変ずること」に注がれる。いまや「人間を哲学の問題とし、哲学を人間の<sup>15)</sup>問題とする」ことが彼の企図であった。言いかえると彼は「人間の最高の本質としての<sup>16)</sup>生きた人間」を彼の哲学の中心問題としたのである。「新しい哲学は、したがって自然学を含めた人間学を<sup>17)</sup>普遍学にする」のだから、このフォイエルバッハの自然主義的思想考は——自然というタイトルで、より「直接的なもの、根源的なものに根ざそうとしている点で、ヘーゲルやマルクスを凌駕」<sup>18)</sup>していたことも事実である。

フォイエルバッハにとっては「真の哲学の初めはもはや神とか絶対者(das Absolute)とかではなくて有限にして死すべき<sup>19)</sup>人間」なのだ。だから彼は、神とか絶対精神というような前提などなしに、——あらゆる自然力を吸いこみ吐き出し、固い大地にしっかりと足をつけた現実的で肉体をもった人間を対象とする。したがって、もっとも直接的、かつ根源的なものを対象とするという点からいえば、哲学の理論的革命といえよう。

マルクスがフォイエルバッハから強く心を打たれたのは、彼の人間学つまりフォイエルバッハの人間主義だったのである。しかし残念なことにはフォイエルバッハは——たんに自然主義的であって歴史的でもなければ経済学的でもない人間しか捉えていない。人間といってもフォイエルバッハの人間は、人間の歴史的・社会的な実践的世界の人間ではない。解り易くいえば、フォイエルバッハのいう人間——あらゆる自然力を吸い込み吐き出

し、固い大地にしっかりと足をつけた現実的で肉体をもった人間を、「資本主義社会における経済的自己疎外されたプロレタリアートとしての人間」というふうに、歴史的・社会的・経済学的視野のなかで捉え直して、いずれが具体的な人間把握かを考えれば容易にわかると思う。

マルクスはモーゼス・ヘスの教示からフォイエルバッハの、前に述べた欠点を素早く理解することができた。

1842年3月13日付のマルクスからルーゲあての手紙をみると「フォイエルバッハの箴言は、彼が自然についてはいやというほど言及しながら、政治についてはほとんど言及していないという点でのみ、私にとって正しくないのです。しかしそれは、現在の哲学を真理とすることのできる唯一の紐帯です<sup>20)</sup>」とハッキリ書いている。マルクスはフォイエルバッハの人間主義の人間把握の欠陥をすばやく捉えてしまっている。だからマルクスはフォイエルバッハに傾倒することによって、逆にフォイエルバッハに欠けているものを教えられたことになる。いいかえるとフォイエルバッハのいう〈人間〉を歴史的・社会的・経済的な視野で捉えなおすという課題が与えられたことにもなる。たしかに人間は大気を吸い込み吐き出す人間かも知れないが同時に市民社会の一員として社会生活をいとなみ労働している人間でもある。もう一つには、フォイエルバッハのいう人間は、人間一般であるから抽象的人間であり「フォイエルバッハの教説が全く《瞑想的》であるし……その教説はただ解釈のみにかかわり、したがって行動の指針を何一つ与え<sup>21)</sup>」ることができないということである。フォイエルバッハはいつも、人間を「抽象において《人間性の本質》の顕現として考察する傾がある。だが、人間は抽象的なものでなくつねに現実的なものであって、つねに技術的发展の特殊の段階のもとにあり、これによって形成されつつ、つねに社会関係の特殊の歴史的形態のもとにある。フォイエバハは《人間そのもの》を考察するから、人間を一個の孤立した個人として、しかもいかなる時代にもいかなる状態でも同一のものとしてしかみることができ

ない」<sup>22)</sup>という欠点をもつ。

ところでマルクスはパリ亡命のあいだに、むさぼるように経済学の研究に没頭したことは再三述べたが、「ヘーゲル哲学の基礎の研究と批判は、この経済学研究と並行して進められ」<sup>23)</sup>ていった。さらに1844年9月以降、親密となったエンゲルスの協力をえて、マルクスは「哲学上の師と昔日の友人たち、つまりヘーゲルやフォイエルバッハ、それにブルーノ・バウアーたちとは、はっきりとことなる自分の思想を形成」<sup>24)</sup>していくべき道が与えられたのであり、その成果こそ『経・哲手稿』『神聖家族』『ドイツ・イデオロギー』であるから、この3つの著作はマルクスにとって、「経済思想の進展を画する第一段階」<sup>25)</sup>だけに、経済学研究、経済学的人間研究への起動力となったフォイエルバッハの影響はまことに甚大である。この前進こそはマルクスが「フォイエルバッハを読むことによって示唆激励されたもの」<sup>26)</sup>なのだからである。

またフォイエルバッハは「搾取と疎外とを含む人間の現実の生活を決して見ていないから、かれには疎外状態についてのほんとうの説明が欠けており、かれがその原因だと想像した宗教的幻想を追い払うという純粋に精神的なもの以外、回復策に欠けている。しかし人間がかれの人間性を剥奪されるのは階級に分裂した社会においてであることを知れば、人間性回復の方法が社会の階級分裂克服という点にあることは明らかである……もしわれわれが人間の真の本性をかれの社会的活動と社会関係によって形成されているものとして考察するならば、われわれは今日の社会に現存しているような、孤立した個人の考え方を克服して、社会的人間性という真実の考え方に到達する」<sup>27)</sup>ことは明らかである。

フォイエルバッハの人間主義を——人間をたんに理論的に解放するのではなくて、政治的・社会的な諸関係において実践的に解放するとういことになると、「疎外された人間とは、宗教的あるいは思弁的な夢想界にとりつかれた個人ではもはやなくなって、人間的尊厳をすべて剥奪された不完全

な社会の成員として、突如あらわれてくる。「そして」人間性を喪失した世界の人間とは、いやまさに、人間性を喪失した社会のなかでの人間にほかならない<sup>28)</sup>」のだ、ということが解るであろう。

この「人間性を喪失した社会のなかの人間」こそは、マルクスが『経・哲手稿』のなかで明快に打ち出してくる内容である。すなわち「古典派経済学は資本主義社会における人間の自己疎外の思想的表現である<sup>29)</sup>」として、「資本主義の労働がいかにして労働者を労働そのものから外在化し、またいかにして人間を自然から、人間の類から、さらにいかにして人間を人間から疎外するかをしめす<sup>30)</sup>」のである。搾取 (Ausbeutung) とはまさに、「この疎外の実質的内容 (reale Inhalt)<sup>31)</sup>」に他ならない。そして、フォイエルバッハの人間学を社会的、経済学的、歴史的視野において捉えれば、「資本主義の体系では、労働者は自己をなくし且つ自己から疎隔された人間にすぎないこと、労働者自身が単に商品および資本として生存することが示される<sup>32)</sup>」のだから、「労働者は富を生産すればするほど、彼の生産が力と広がりを増せば増すほど、それだけ貧しくなる。労働者は商品を作れば作るほど、それだけ安価な商品となる<sup>33)</sup>」というように、疎外を「経済学的悲劇」<sup>34)</sup> (ökonomische Tragödie) として捉えるヒントさえつかめば、労働者の利益と支配者の利益 (die Interesse der Herrschenden) の対立から、マルクスは容易に「資本主義における和解しがたい階級対立の本質を洞察<sup>35)</sup>」しうるのだから、フォイエルバッハがマルクスに与えた影響はじつに重要であり、以上を通読して理解しうるように、フォイエルバッハがマルクスに与えた影響を容易に見過すべきではない。

注 1) G.Lukács, Der junge Marx, op. cit., S. 21. ルカーチ『若きマルクス』邦訳、前掲、46頁。

2) ibid., S. 22. 同書、48頁。

3) ibid., S. 22. 同書、49頁。

4) ibid., S. 23. 同書、49頁。

5) Engels, Ludwig Feuerbach und Ausgang der klassischen deutschen

- Philosophie, M. E. A. S. Band 2, op. cit., S. 42. 『マル・エン2巻選集』第2巻, 28頁。
- 6) G. Lukács, op. cit., S.S. 22~23. ルカーチ, 前掲, 49頁。
  - 7) D. McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p. 141. マクレラン『マルクス主義以前のマルクス』邦訳, 前掲, 162頁。
  - 8) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p. 96. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲, 152頁。
  - 9) ibid., p. 107. 同書, 170頁。
  - 10) Feuerbach, Vorläufige Thesen zur Reformation der Philosophie (1842) Reclam, op. cit., S. 187. 『フォエルバッハ全集』第2巻, (中期哲学論集), 前掲, 55頁。
  - 11) ibid., S. 187. 同書, 55頁。
  - 12) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p. 95. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲, 150頁。
  - 13) D. McLellan, Marx before Marxism, op. cit., p. 143. マクレラン, 『マルクス主義以前のマルクス』前掲, 164頁。
  - 14) K. Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S. 336. レヴィット『ヘーゲルからニーチエへ』(II) 前掲, 103頁。
  - 15) ibid., S. 336. 同書, 103頁。
  - 16) ibid., S. 336. 同書, 103頁。
  - 17) Feuerbach, Grundsätze der Philosophie der Zukunft (1843), Reclam, op. cit., S. 269. 『フォイエルバッハ全集』第2巻, 前掲, 157頁。
  - 18) レヴィット『ヘーゲルとヘーゲル左派』麻生建邦訳, 1975年, 未来社, 114頁。
  - 19) K. Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S. 336. レヴィット『ヘーゲルからニーチエへ』(II) 前掲, 104頁。
  - 20) M. E. G. W. Band 27, S. 417. 『マル・エン全集』第27巻, 書簡集 (1842~1851), 362頁。
  - 21) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p. 114. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲, 181頁。
  - 22) J. Lewis, The Life & Teaching of Karl Marx, op. cit., p. 72. ルイス『マルクスの生涯と思想』邦訳, 前掲, 98~99頁。
  - 23) G. Lukács, op. cit., S. 53. ルカーチ『若きマルクス』前掲, 131頁。
  - 24) エルネスト・マンデル『カール・マルクス』前掲, 34頁。
  - 25) 同書, 34頁。
  - 26) D. McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p. 110. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲, 173頁。

- 27) J. Lewis, op. cit., pp. 72~73. ルイス, 前掲, 99頁。
- 28) マンデル, 前掲, 35頁。
- 29) Lukács, op. cit., S. 56. ルカーチ, 前掲, 137頁。
- 30) ibid., S. 56. 同書, 137頁。
- 31) Juri Dawydow, Freiheit und Entfremdung, Verlag der Marxistischen Blätter, Frankfurt /M. 1962, S. 65.
- 32) K. Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S. 299. レヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』(Ⅱ) 前掲, 56頁。
- 33) M. E. G. W. Ergänzungsband, op. cit., S. 511. 『マル・エン全集』第40巻, 431頁。
- 34) J. Dawydow, op. cit., S. 65.
- 35) K. Löwith, op. cit., S. 299. レヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』(Ⅱ) 前掲, 50頁。

## む す び

繰り返していうようだが——学生諸君は、けっしてマルクスがヘーゲルから弁証法をとり、フォイエルバッハから唯物論をとって唯物弁証法を組み立てた、などという安易な考えをもってはならない。マクレランの研究によると、フォイエルバッハこそ、マルクスの最初の史的唯物論の叙述——とくに〈土台〉(下部構造)の概念の定式化を助けた人物であるという。フォイエルバッハが、自然という土台(下部構造)と精神(上部構造)として書いたものが、マルクスの唯物史観の定式に応用されているのだということである。マルクスの1844年8月11日付のフォイエルバッハあての書簡をみると「あなたの『将来の哲学』や『信仰の本質』は、その大ききこそ制限されていますけれども——これらの著作で(あなたは)社会主義に哲学的基礎を与えました」とさえ書いているくらい高い尊敬を捧げている。また、エンゲルスにしろモーゼス・ヘスにしろ、みずから「フォイエルバッハの弟子」と称していたことは周知のとおりなのである。

フォイエルバッハの重要性はいくら高く評価しても評価しすぎることはない。「だれが」とマルクスはいう。「諸概念の弁証法に哲学者たちだけ

にわかる神々の戦いに終止符を打ったか。フォイエルバッハだ。だれが以前のがらくたのかわりに人間をおき，同じ一撃で無限な意識を駆逐したか。フォイエルバッハだ。フォイエルバッハただ一人だ。」と。

繰り返していう。マルクスの思想形成を学ぶにあたって，フォイエルバッハの意味と貢献を軽視することは危険である。